

「グローバルをローカルに考える」 得たものは、その考え方です

第35回 「東南アジア青年の船」 事業

農業

×

正田 明日香

事業で得たことは何ですか？

参加当時、環境科学を専攻していた私にとって、同時期に東南アジア5ヶ国でホームステイできることは魅力的なチャンスでした。現地の環境問題への関心度、生活の中でのエネルギー問題、日常の食糧事情。日本国内でも各国のデータは調べられますが、環境問題について各々の地域でどんな認識があるのか、日常ではどんな状況にあるのか、国単位ではなく個人の目線から見たという気持ちがありました。

2泊3日のホームステイでは、生活に密着した環境問題を自分の目で見て、感じる事ができました。電車内で見たパーク＆ライドのポスター、オフィスビルのコピー機にあった'Recycle'の張り紙、ガソリンの値段、ステイ先近くの川の様子、街中の大気の様子、そしてホストファミリーから聞いた「環境問題」への認識。それらは本などで断片的に見るのとは、感じ方がまるで違いました。グローバルな問題だからこそ、ローカルの視点で見ることの意義。それが、私がこの事業で得た大切なもののひとつでした。

事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

大学での学びを活かし、環境問題の解決に貢献したい思いで私が就職したのは、いわゆるグローバル企業でした。グローバル問題を解決するには、グローバルに活躍できる場が必要だと思ったからです。しかし勤務するうちに、グローバルに仕事をするということの意味を理解するようになり、それに対して私は違和感を持つようになりました。同時に環境問題というとても規模の大きな問題への取り組み方にも、疑問を感じる様になりました。環境問題は必ず考えるべき問題であるけれども、もっと他により良いアプローチの仕方があるのではないかと。そんな時に思い出したのが、「グローバルな問題をローカルに考えること」。まさに、東南アジア青年の船で感じたことそのものでした。



農学部で学生時代に、畑や田んぼで土にまみれた経験があったことや会社の配属先が農業の盛んな滋賀県であったことが影響し、私は地域に根ざし環境に関わる仕事＝農業を選択する決心をしました。

これからやりたいことは何ですか？

現在私は、農業生産法人で第一次産業の最前線を身をもって経験しています。生産の苦労はもちろん、作物を売る難しさや農地の問題。農家が直面している困難は想像していた以上に深く、多岐に渡るものだと感じています。

その中でも私は、これまで培ってきた経験や視点を活かし、作物を売る面で農家のサポートができればと考えています。まだまだ経験が充分とは言えませんが、起業し、私がこれからの地域農業活性化の一助になりたいと思います。



主な略歴

- 2008年 第35回東南アジア青年の船事業参加
- 2009年 電機部品メーカーに就職
- 2013年 農業生産法人に転職

人生の広がり と 使命感を肌で感じる体験 ～ 国境を超えた地球人という規模での視点～

第33回 「東南アジア青年の船」 事業

人材育成コンサルタント × 大網 陽子



主な略歴

- 千葉県富津市出身
- 2000年 東邦大学理学部化学科卒業
- 2006年 内閣府の東南アジア青年の船事業に参加
- 2007年 人材育成コンサルティング会社に転職

ベンチャー企業から大手企業まで幅広い年齢層の人材育成課題について向きあい、人材育成コンサルタント、マーケターとして各種の課題解決に従事している。また、ファシリテーターとしても、自ら、研修の登壇を行う。主な専門領域はリーダーシップ開発。

事業で得たことは何ですか？

「リーダーとは何か？」「リーダーシップとは何か？」この問いに、自分なりの解が見いだせたことです。事前研修期間において、AYL選挙に立候補をした際、東南アジア青年の船事業に参加する意義や、自分の役割、そして自分が理想とする参加青年たちとの理想の姿を思い描きました。その際に、リーダーとは必ずしも、自分が先頭に立ち、向かうべき舵取りをするだけで

なく、仲間を信じ、それぞれのメンバーの理想の姿を実現するために、共に考え、共に行動し、応援するという形もあるのだということを経験しました。事業終了後も、自分の目指したいリーダー像を体言し続けることができているのは、自らこのことに気づけたことが大きいと確信しています。

事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

アセアン10カ国+日本の参加青年と過ごし、本事業が終了した後、大きく2つのことを思いました。一つは、言葉、文化や思想が違うことの価値。その違いを互いに受け入れあい、共栄共存を目指していくことの重要性です。特に、互いを理解し合おうという姿勢は重要で、その考えを持つだけで、不思議と言葉の壁が乗り越えられる感覚がありました。さらにそれは、自分自身のエネルギーとなり、思っているだけでなく、実際に行動を起こすことにもつなが

りました。そして、二つ目に私の人生・時間を何に使っていくのか？ということを考えてみました。私がこの事業に参加したのはちょうど30歳の時だったのですが、私自身の経験値を積み重ねていくだけでなく、「次の世代の人たちにも、様々な体験をしてもらい、人生が充実したものであってほしい。そのための支援をしたい」ということを強く感じたからでした。その中で、私が出した答えが、現在の「人材育成コンサルタント」という職業でした。

これからやりたいことは何ですか？

私の使命は「人の幸せのお手伝い」です。それは、一時的な幸せを起こすことではなく、「常にポジティブにあり続ける」という考え方や行動ができる人を、地球上に一人でも多く増やすこと。人材育成というと、何かを教えることと思われがちです

が、実際は、自分自身の経験や体験を通して、自分で気づかなければ何も変わらないと思います。私は、そのためのきっかけづくりを今後も様々な形で、提供し続けていきたいと考えています。

心から東南アジアを愛するようになり ました。

第22回 「東南アジア青年の船」 事業

スポーツ文化研究者 × 菱田慶文

事業で得たことは何ですか？

事業で得たことは、一生付き合える仲間の存在です。私は、事業に参加するまで、アメリカやタイでキックボクシングとムエタイの修行をしていました。しかし、米国では、どちらかと言えば、私と仲良くしてくれるのは、「チカーノ」と呼ばれるメキシコ系アメリカンの人達でした。しかしながら、ジムに来るチカーノ達は、比較的貧しい部類に入る人達でした。ギャング団に入っている人達も多く、ジムに来なくなったら、喧嘩で亡くなったなど、風の

噂で聞いたりもしました。また、タイでムエタイ修行をしていた時は、ムエタイの選手は、貧しくて学校を出ていない人ばかりでしたので、英語が理解できずに、コミュニケーションをとることが難しく感じていました。しかしながら、事業の参加者は英語が達者で、みんなびっくりするほど、親日感を持っており、一生の仲間になってくれたメンバーも何人もいます。それが、人生の宝物になりました。



主な略歴

1995年 東南アジア青年の船に参加
2001年 東京都 教育相談員
2008年 早稲田大学人間科学部
2009年 博士号取得
現在 帝京平成大学 教員
早稲田大学スポーツ科学研究センター 招聘研究員

事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

私は、事業に参加する前までトラックの運転手をしたり、露天商などをしていました。事業参加後、どうしても勉強したくなり、進学を考えました。日本人の参加青年の仲間は、一生懸命に語学の修得を応援してくれたり、入試、面接の練習まで付き合ってくれました。進学してから、タイ国の大学院に留学することになり、本格的にムエタイ研究に挑戦することになりました。その時のタイ国参加青年から受けた恩は、一生忘れることが出来ません。私の試合の応援だけではなく、ムエタイのジムを一緒に探してくれたり、プロモーターとの橋渡しをしてくれたり、博士論文を提出するにあたり、翻訳や通訳まで無償で引き受けてくれる参加青年もいました。そんな大応援団のおかげで、無事に博士論文も提出することができ、本の出版をすることも出来ました。事業のおかげ



で研究者として、生きていく自信が芽生えたのです。現在は、格闘技文化だけではなく、スポーツと教育を絡めた研究を国内外で行えるようになりました。

これからやりたいことは何ですか？

これからやりたいことは、タイをはじめとした東南アジア各国との友好を深める活動を行いたいと思っています。タイ国を例にあげるなら、スポーツ交流として、日本の大学生とタイ国の大学生とが、ムエタイや格闘技を通じて国際交流できるような大学間協定を作っ

たり、民間でも日本のジムとタイのジムが交流し、お互いの国の若者同士が心から信頼できるような国際交流を手助けして行きたいと思っています。草の根の交流が世界平和に結びつくと思込んでいるからです。

東南アジアを通じて世界と出会う♪

第38回 「東南アジア青年の船」 事業

経済産業省

×

武田 卓也



主な略歴

- 2008年 東京都出身
大学入学と同時に、Good Samaritan Club という学生ボランティアガイドサークルに入り、京都の魅力を外国人観光客に伝える内閣府の東南アジア青年の船事業に参加
- 2011年 経済産業省に勤務
- 2012年 仕事上でもプライベートでも日々東南アジアに触れています

事業で得たことは何ですか？

大学生活最後の年に参加させていただいた、本事業に期待したことは、ランゲージスキル(特に英語力)の向上、東南アジア諸国の今の姿をこの目で見ることで、事業後も長く継続する友人関係を築くことの3点でした。お陰様で、英語力、ダンスやボディランゲージも上達し、ホームステイで不明点は全てホストファミリーや現地の方々に直接伺い、実生活を体感できたことで、東南アジアに対する興味が一層湧き、友人に關しても船上でのアカデミックな議論の中で

政策立案者や大学関係者と仲を深め、今も連絡を取り合っています。

しかし、本事業で当初の予想と異なる大きな収穫がありました。それは自分が将来なりたいたいと思えるロールモデルを発見したことです。それは、同じ活動グループのリーダーであるタイ青年で、彼は英語、中国語、母語を巧みに操る軍人で、リーダーシップにもコミュニケーション能力にも優れていました。「数年後に彼みたいになりたい」と思える人に出会えたのは、本事業最大の糧だと感じています。

事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

およそ2か月の間、ASEAN10か国の青年と交流をしながら、ASEANを真に理解しようと、もがき楽しむ経験は、異文化理解に対する自信とASEAN諸国に対する揺るぎない知識とさめやらぬ興奮をもたらしてくれました。

下船後には、事後活動として参加青年同期メンバーと共に『J-SSEAYP』という活動をおこなって、普段忙しいビジネスマンでも手軽に東南アジアに触れる事ができるような文化交流体験やディスカッション訓練などを提供しています。

また、個人的には、東南アジアの観光客と日本で出会った際には、積極的に話しかけて道案内をすること等を実践しています。去年は、ベトナムからいらしたITプログラマーの方と偶然に阿蘇山行のバスで一緒であったため、付近の観光を共にして日本文化を紹介



する機会に恵まれました。他にも、語学上達のために、インドネシア語検定E級を取得、知人と東南アジアの勉強会を開催等、様々な東南アジア関連の活動を実施しています。

これからやりたいことは何ですか？

昨今、日本と東南アジア諸国の政治的、経済的な関係が深まっています。この良好な関係の継続に資したいです。仕事面では、行政官として将来東南アジアに赴任して、現地と日本企業の橋渡しを手助けしたいと思います。

プライベート面では、まずは通訳案内士検定という国家資格を取得して、日本にお越しいただいた東南アジア各国をはじめ外国の方々に対してボランティアガイドを提供します。プロフェッショナルとして、誤解のない正しい日本文化を発信し、魅力をお伝えしたいと考えております。